

## あ>ホキティカ

「あなたの町にはいくつの学校があるの？」

この質問に、あなたはすぐ答えられるだろうか。おそらく答えられる学生は少数だろう。私は、この派遣を通して異文化について学ぶことは自分の文化を知ることと深いつながりがあると実感した。

私たちが派遣されたのは人口約3000人の小さな町、ホキティカ。景色、人々、食事すべてが私にとっては新鮮だった。彼らと交流していくうちにまず驚いたのは、皆が自分たちの文化についてすぐ人に説明できることだ。マオリ族のことや町の歴史、気候のことまで慣れた様子で教えてくれる。なんと小学生でも。リスニングが苦手な私でもわかるように易しい単語で何度も説明してくれた。ニュージーランドの文化に興味があった私にとって、この経験は貴重ですばらしいものだった。

こうして安心していただに、とある問題が起きる。それは、「日本はどんなの？」と聞かれたときにまったく答えられないことだ。私の英語力だけの問題でないことは明らかだった。単純に知らないのだ。毎回「わからない」、「知らない」と言うのは恥ずかしかったし、悔しかった。こんな貴重な機会に黙ってはいもったいないと思い、私は隙間時間に日本文化や江戸川区について調べ直した。自分のなかの固定観念をなくして、翻訳も使った。

そして絶好の機会がやってくる。ホストシスターのJennyと二人でドライ

ブすることになったのだ（これは私が忘れ物をしたからで完全に偶然である）。Jennyはいつも優しくて、車の中でもたくさん話しかけてくれた。日本では何歳から選挙権が持てるのか、と聞かれたときは「選挙権」という単語がわからず焦ったが、翻訳を使ってことなきを得た。また浴衣と着物の違いや日本の高校についても、単語やジェスチャーでつないでなんとか説明することができた。

鈴木青少年の翼を通して、私は大きく成長した。ここには書ききれなかったが現地のパーティや学校、ホームステイの経験はかけがえのない宝物だ。そして、私たちが海外の文化を学びたいと思うのと同じで、日本文化も彼らにとっては興味深いものだということが、今回の派遣でよくわかった。私たちは案外、江戸川区や日本について知らない。これを読んでいるあなたも、ぜひ一度自分の故郷について調べてみてはいかがだろうか。

